

当院で無痛分娩を受けていただけない方

(1) 日本語での日常会話が、通訳者・翻訳機なしでは困難な方

無痛分娩は、頻度は非常に低いとはいえ合併症の可能性があります。硬膜外カテーテル挿入段階では脊髄損傷を防ぐため、患者様が動かないように十分な理解と、ピリッとした異常感覚(paresthesia)が無いが、確認しながらの針操作が必要となります。

また硬膜外麻酔使用中は常に耳鳴りや口腔内の痺れ、下肢運動障害や高位硬膜外麻酔となった際の呼吸困難・握力低下などカテーテルの位置異常を疑わせる症状がないか常に確認しながら鎮痛効果を維持していく必要があります。

そのため麻酔科医との密なコミュニケーションが不可欠ですので、上記対応としております。

(2) 分娩時 BMI ≥ 40

硬膜外腔は、無痛分娩を行う腰椎部分では、最短距離で皮膚から4~6cm程度の深さにある、幅5~8mm程度のスペースです。この硬膜外腔へは、皮膚→柔らかな皮下脂肪→やや硬い靭帯→硬膜外腔へ、徐々に変化する指先の感覚を頼りに、数mmずつ針を進めていくことが必要です。

これに対してBMIが高くなるにつれて、皮下脂肪の増加や皮下浮腫の増強とともに、皮膚~硬膜外腔の距離は深くなります。すると注射の難易度は高くなり、注射を試みたものの硬膜外カテーテルを留置できずに断念したり、カテーテルが皮下でたわんで抜けてしまう確率が上昇します。針の長さ(8cm)が硬膜外腔まで届かない場合には硬膜外麻酔は物理的に不可能となります。

(参考)

BMIは35で150cmの方で79kg	160cmの方で90kg	
40で150cmの方で90kg	160cmの方で102kg	が目安となります

当院で経膈分娩可能な方のうち、無痛分娩に関してご相談いただきたい方

(1) 脊髄疾患・脊椎疾患(脊椎術後)

(a: 脊髄疾患)

二分脊椎(脊髄髄膜腫・脊髄脂肪腫)・脊髄空洞症・キアリ奇形などの診断をされている方、脊髄圧迫症状(足の麻痺や痺れ、排尿/排便の感覚障害)がある方、脊髄変性疾患や脱髄疾患がある方は、硬膜外麻酔をすることで産後に症状が悪化したり新たに神経損傷を生じる可能性があります。硬膜外麻酔での無痛分娩は避けた方が良いでしょう。

(b: 脊椎疾患・脊椎術後)

① 側弯

背骨のねじれ具合によっては硬膜外麻酔が非常に難しい可能性があります。

なるべく妊娠早期に当院産婦人科を受診ください。

妊娠中でも腰椎レントゲンは安全に施行できますので、レントゲン撮影の上、麻酔の困難度を麻酔科医が評価いたします。

② 腰椎椎間板ヘルニア(手術なし)・腰椎分離すべり症

現在足の麻痺や痺れなどの症状が全くなければ、無痛分娩が可能な場合が多いですが、無痛分娩外来受診時には必ず麻酔科医にお伝えください。病院での診察や画像検査、ブロック注射などの治療を受けられていれば、その内容(できれば画像を持参)もお伝えください。

③ 脊椎術後

無痛分娩では第2～5腰椎の間で硬膜外カテーテルを挿入しますが、陣痛の痛みを取るためには、カテーテルから投与した局所麻酔薬が第10胸椎～第4仙椎まで広範囲に広がる必要があります。

このため、注射部位以外であっても、胸椎/腰椎/仙椎に

・脂肪腫など脊髄腫瘍を摘出した

・椎弓切除・椎弓形成・固定術を行なった

・LPシャント(腰椎くも膜下腔-腹腔シャント)術を行なった

既往がある場合は、硬膜外腔が癒着して麻酔が十分効かない・カテーテルが神経を刺激して感覚異常が出るなど、無痛分娩を行わない方が良い場合があります。

ただし、頸椎などであれば無痛分娩をしても大丈夫な場合もありますので、

脊椎の手術をされた既往がある方は、(たとえ手術を受けた病院で「麻酔は大丈夫ですよ」と言われていたとしても)なるべく妊娠早期に、手術を受けた病院の診療情報提供書を持参し、当院産婦人科をご受診ください。

(2) 妊娠前 BMI \geq 35

注射手技が困難な可能性が多くあります。

詳細は当院で無痛分娩を受けていただけない方(2)をご参照ください

(3) 脳血管疾患・脳腫瘍

① 脳梗塞後・脳出血後などで下半身に麻痺や感覚障害がある方
硬膜外麻酔をすることで元々ある症状が悪化したり、新たに神経損傷を生じる可能性があります。硬膜外麻酔での無痛分娩は避けた方が良いでしょう。

② 脳腫瘍(下垂体腺腫・髄膜腫・聴神経腫瘍など)と言われている方
腫瘍により頭蓋内圧が上昇している方に硬膜外麻酔や脊髄くも膜下麻酔をすることで、脳幹ヘルニアを起こしたり、頭蓋内圧がさらに上昇し生命に関わる場合があります。
なるべく妊娠早期に、診断を受けた病院の診療情報提供書を持参し、当院産婦人科をご受診ください。当院脳外科での状態評価を受けていただき、その上で無痛分娩が可能か麻酔科医が判断いたします。

(4) 皮膚疾患

注射をする部位の近く(約10cm範囲)の皮膚にブツブツ・じゅくじゅく・引っ掻き痕などがある場合、硬膜外麻酔は行えません。傷ついた皮膚にいる細菌が、カテーテルを伝って背骨の奥で増殖し、髄膜炎が生じて意識障害/死亡したり、硬膜外膿瘍が生じて下肢麻痺や膀胱直腸障害(排泄のコントロール不能となる)危険性があるためです。

妊娠中は妊娠性掻痒症・妊娠性痒疹・多形妊娠疹・アトピー性皮膚炎の増悪など皮膚トラブルが起こりやすい時期です。時々自分の背中を鏡でチェックして、異常があれば早めにお近くの皮膚科受診をお願いします。皮膚は数日では治りません。

無痛分娩外来時には大丈夫でも、分娩当日の皮膚の状態を見て麻酔をお断りすることがあります。